

紀南郷土学会研究録

(資料集③)

紀南郷土学会研究録

(資料集③)

南紀郷土学会 刊 研究録 一覽表

一、紀州に於ける銅鐸文化 1

芝口 常楠

二、農業と貝

片山 隆三

三、

紀州に於ける銅鐸文化

芝口 常楠

銅鐸は稍扁平状をなせる鐘形の銅製品で、日本特有のものと言ふべきもので、中華国古代の所謂銅鐸と称するものとは全く異なり、只形状の上に於いて似ているところがあるので名を借りたのに過ぎない。故に銅鐸の名を否とする学者もあるが、今は古来の慣用に従つて一般にこの名を用いている。彼の全く楽器なるに、これは楽器として鳴るべき機能を有するや否やについても疑わしく、第一その製作は薄手で左右に鰭をつけ、上部は鉦をなし耳飾を有し、鐸身上部に穴のあるを普通としむしろ鳴らすべきものでないと考えられている。

この銅鐸は我国の古い古事記、日本書紀、萬葉集にも所見なく、又伝説にもあらわれず、只発掘の歴史あるのみである。即ち最も古い記録としては扶桑略記天智天皇の七年^{（六六八年）}滋賀の都を奠めて崇福寺を草創せし時に発掘し、次に続日本紀和銅六年^{（七三三年）}大和国宇陀郡長岡野で発見、同書承和九年^{（八四二年）}六月若狭に於いても発見されたのが伝えられている。當時千有余年の昔において既に地中に埋没していたのであるから、

その起源の古いことは想像の外である。

古代人は何のためにこの銅鐸を使用したかについても学者間に定説なく学界のなぞになっている。或はインドの阿育王の宝塔なりと言うも、印度及び中華においてその出土がなく海外においては只朝鮮の東南部にあるのみで、日本特有のものと考えられるのである。日本において、もその出土の地域は限られ、畿内を中心として東はに遠江に多く、而して遠くはなれて伊豆に一個を見出し、美濃加賀を境し、西は四国において阿波もつとも多く讃岐・土佐に及んでいるが伊予からは出ない。中国地方も石見・安芸にその出土を見るがその数少なく九州には全く見出せない。朝鮮東南部慶州で発掘されたのは二個で少しく形式を異にしているが、銅鐸及び銅鏡の伴出で注意をいく。銅鐸は中華及び朝鮮より我国に渡來したと考えられるが今出土上の分布区域からはそうは思われぬ。

さてこの銅鐸は古來どの位発掘されているかと言へば梅原末治博士の昭和二年^{（一九二七年）}発行の“銅鐸の研究”

によれば出所など不明のもの三十個、海外にあるもの六個、朝鮮出土のもの二個を加えて二百四十個に達し、その中最も多きは近江の二十二個、三河の二十個、阿波の十四個、我が紀州にあつては同書に記載するもの九個、これに脱漏したものもあり、其の後の発見発掘によつて、今日においては出土不明の二個を除いても総数二十一個の多数に上り、畿内中心地の和名の九個、和泉の六個より遙かに多い。今日においては日本全国における数も以上所蔵の数より相当増加していることであろう。埋没状態については流されて來たと思われるものもあるが、又故意に埋めたと見るべきものも多く、故喜田貞吉博士は銅鐸はその民族のもつ所の宝器で実用品でない。アイヌ族の宝器鍬形なるものと同じく実用を離れて來たもので、其の民族の衰退と共にもつとも安全と思われる地中に埋藏隠匿したものと言われている。

猶銅鐸の出土について考うべきことはその多くは伴出物はなく單獨な出土が多いことで、之が銅鐸文化及び時代を考察する難関となつていた。時にはその付近から弥生式土器、石器類の出たところはあるが、もつとも注意をひいてのは大正七年（一九一八年）五月五日大和国南葛城郡吐田郷村大字長柄において溜池工事中発見した銅鐸と共に一個の銅鏡が表れた事である。この鏡は学者の認めている前漢時代の式とする四乳葉紋鏡や方格四乳葉紋鏡に近似する外、從來の鏡に類を見ない構図であると言ひ、之と全く同一形式の遺品が長門国豊浦郡安岡村で出土し、其他沿海州や

朝鮮にも出たし、而かも銅鐸などの伴出もあつて銅鐸の年代觀を初めて樹立するに至つたといわれている。

翻つて我紀州に於ける出土の銅鐸はすべて二十三個で袈裟襷紋様を有し、その製作から銅鐸の後期に属するものと考えられている。出土の分布区域を見るに古墳時代より歴史時代にかけて最も繁榮したと思われる紀北地方において、只粉河寺の一個が、それも記録にのみ残っているだけで如何にも淋しい。有田郡に入つて四個、有田川河口付近より出で、日高郡に入つて断然多く十一個に及び、日高平野、南部平野付近に限られ、而して他郡出土品の中小型なるに比し大型品の多きは注意に値する。西ムロ郡においては六個、田辺平野及び富田川平野付近より出でしも惜しい事には発掘より転々人手にわたり確たる記載の欠けているものが多い。もし銅鐸文化を云爲するとせば、日高郡は正にその中心地をなすであらう。

大きさについては小は高さ七八寸から大は五尺をこゆるものがあるが普通一尺四五寸より三尺内外のものが多い。紀州における尤も小さいのは日高郡湯川村大字丸山出土の七寸位のもの、大なるものは全郡道成寺所蔵の三尺八寸を最とする。

各地の出土品についての簡述

一、那賀郡粉河寺銅鐸

今実物を存していないので紋様形式は不明
醍醐三寶院にある「諸寺縁起集」所収天喜二年^(一〇五四)京の「粉河寺大卒都婆建立縁起」に

從草創來經五十年 為造件堂鏤夷地間 從地底掘及銅鐸一個 長一尺五六寸許 其様体甚神妙 今納寶藏 以知往昔聖□□□とある。本寺の草創は宝龜二年^(七七二)と言われているからそれより五十年を経ば、正に弘仁十年^(八一九)に相当するわけである。

其の長さ一尺五六寸ばかりと言えは中等位の大さきである。

二、有田郡保田村千田銅鐸

明治十年三月二十七日全地酒井嘉助氏によつて同村大字千田の内小字左衛門九郎芝崎の山丘から出たもので総高一尺四寸五分の簡単な袈裟襷紋で今でも発見者に所有されている。

三、有田郡箕島町山地銅鐸

明治二十五年頃全地石井元之助氏の発見で少し離れたところに銅劍六口があつたと言う。又銅鐸々身の内部土を満てたまゝ中指大の青銅製の棒があつたと言われるが舌であるか否かゞ全く分らない。全町の立神々社に保管されていたが、其后全地の古物商に売却したと言ひ行方不明になつてゐる。大きさは県への届書に高さ八寸、

底底部直径六寸、重さ六百三十匁とあり小形のものであるが、紋様その他の形式は明らかでない。

四、有田郡箕島町新堂銅鐸 二個

昭和七年十月十九日全町大字新堂字大峰で開墾中全地蜂屋専次郎氏によつて発見せられたものである。地下一尺五寸の処で小なる方が大なるものゝ内部に入子になつて埋まつていたと言う。大さ甲は高さ一尺三寸二分、乙は一尺五分何れも袈裟襷紋様である。

五、日高郡藤田村藤井銅鐸

所謂道成寺銅鐸と称するもので、宝曆十二年^(一七六二)矢田村道成寺の門前に接する藤井村大字藤井領の田圃中より発掘したもので、今道成寺の寺宝となつてゐる。高さ三尺八寸、底径一尺一寸の袈裟襷紋の大型品である。

六、日高郡内原村大字荊木銅鐸 二個

大正十二年三月五日、全地荊木字向山にて発見。二個あつて互の口の方を向け合い松の根元に埋まつていた。甲の高さ二尺八寸五分、乙は二尺七寸二分、紋様は共に袈裟襷の大型品。付近には古墳も散在し、又磨製石器も多く出ている。本品は今東京上野の博物館に買上げられている。

七、日高郡湯川村丸山銅鐸 三個

昭和十二年二月九日松原村大字田井、田端與三郎氏が開墾中、地下一尺五寸許の下より発見したもので場所は丸山字朝日谷とゆう亀山の東の

尾で人里を離れている。山の尾峰より約三米も下った傾斜面で、この山裾には群集古墳があったがもう開墾されたか分らない。三個とも小形で矢張り袈裟襷紋の粗拙なもので、甲は鐸身六寸五分・底長径三寸九分・重さ約一〆六百匁、乙は高さ七寸三分・底長径三寸七分・重さ一〆匁、丙は鐸身高さ五寸・底長径三寸五分・重さ一貫匁、付近弥生式土器の破片を見る。本品は東京上野の博物館に納まっている。

八、

日高郡出土地不明銅鐸

明治三十年^(一八九七年)日高郡日高村にて発見されたというがはたしてどこから出たのか不明である。日高平野地方を特に日高と称するから、或はこの付近で得られたものと想像する。現在和泉の山川七左エ門の珍議にかゝり高さ三尺五寸もある袈裟襷式の大型品である。

九、

日高郡上南部村大字西本庄だま谷銅鐸

本品は東京大学人類学教室に所蔵されているもので、安政六年^(一八五九年)全地阪本喜八郎氏が発見、當時之を田辺藩に献じ、更に本藩たる紀州侯に致し、後紀州徳川氏よりこゝに寄贈したものである。本品は鈕を失い現存するのは鐸身ばかりであるが、本来の高さが二尺三四寸もあるうと思われる。紋様は袈裟襷であるが細部にわたっては他に類例のない紋様を有する。

十、

日高郡上南部村大字西本庄字桑谷雨請山銅鐸

大正元年^(一九一二年)十二月一日全地開墾中栗山捨吉氏の鋏

先にかゝつて見出されたもので、人類学雑誌(第二十九卷第二号)大野雲外氏の旅行記中には、地表約三尺にあつて鈕部を下方に向け南北に斜めに横わり其の中に土壌充滿して他に何等の伴出物がない。この埋歿は人為を以て故意に埋めたものとは思われずと書かれている。高さ三尺三寸・重さ四貫六百匁、紋様は袈裟襷、今東京博物館の所蔵となつている、

一一、日高郡上南部村大字西本庄字大久保谷銅鐸

前記天請山南方一溪を隔て、略同地形の処で大正九年四月二十三日、全村庄司松吉氏が開墾中地下約五六寸の処で発見、東部を東南に向けていたといゆう。下部欠損・全高三尺六寸七分・底部長径一尺八分・重量約四貫七百匁、紋様は袈裟襷。大体雨請山のもとに似たるも丈高く細手である。本品は東京博物館に採納せらる。

一二、日高郡上南部村大字晩稻字平銅鐸

此の地は常楽とゆう部落に近き丘陵で俗に金剛の峯と称している。昔の寺院に係る所と思われる。今は開墾せられて畑地となり居りこゝに林道をつくる爲に昭和五年^(一九三〇年)三月九日、全地坂口茂次氏・崎山金藏氏外四名が旧道切下げ工事中鋏先におなじつたものである。従来上南部出土の銅鐸は三個共南部川の右岸に発見されたが、これは左岸から出土している。高さ二尺二寸・重量四貫三百匁・袈裟襷紋の大型品。當時発見者、坂口茂次氏の所有に属している。

一三、西牟婁郡朝來村大字岩崎字野田銅鐸

或は大字岩崎字土平^{ドクイラ}の出土ともいわれるが、両地とも接近している処で聞き違いによつて傳えられたものらしく、田辺市故宇井可道氏の遺稿中に

^{（一八〇四〜三〇年）}

文化文政の頃なりしが本郡朝來村大字岩橋字野田の山より一つの宝鐸を掘出したる事あり（中畧） 庄屋某より届出たるを當時朝來組大庄屋福田卯平次之を携えて旧田辺阪大官所に届出たり（中畧） 明治維新の際、代官野口隆平の手に渡り、其の子山本高太郎所有し、福路町骨董商加藤松吉に賣渡し（中畧） 其の後辻市右エ門の手に渡り、同氏より神戸の方に転賣せしに遂に英国倫敦博物館の備品となれりと聞く。

^{（一八四八〜五四年）}

とある。之を嘉永年間の発見と書いたものもあるが同一のものを言っているのである。大きさ、紋様は不明。後記本郡下秋津村出土の銅鐸は大英博物館の第一号品として保管されているので、倫敦博物館に買われているとすれば、同館の二号品又は三号品に当たる。

果して然るば紋様は袈裟襷で二号品とすれば高さ一尺九寸七分、三号品とすれば一尺四寸のものである。

一四、西牟婁郡南富田村大字中銅鐸 二個

田辺の医師目良碧斎の著にかゝる「熊野雜誌」

^{（一八八九年）}
（明治二十二年）の野口香水傳中に

当郡中邑農夫索レ地得二古鐘一監督者曰二亜郁王法鐸一也豎五六尺囲一抱半鉄色古碧着水珍藏後鬻二外人一得二五百金一云 後又同邑出二同鐘一田所氏藏レ之鑄造年不二分明一

とある。文中「中邑」とあるは今の富田村大字中のことで、野口香水氏の賣つたのは何国人で、今その銅鐸は何れにあるかは明らかでない。此の記事によつて今一つ同地から出たのを田所氏の所有になつてゐる。今辰馬悦藏氏の所藏にかゝるものはこれだろうと言われる。

一五、西牟婁郡下秋津村大字矢矧字矢太ヶ谷銅鐸

^{（一八九〇年）}
明治二十三年頃農民が開墾中に発見したもので、田辺の古物商庄司保太郎氏が銅のつぶし値段七円にて買い、即日同町の辻市右エ門氏に十五円にて売却した。辻氏は多年愛現の後、神戸方面へ数百円にて賣却・庄司・辻氏の実話によれば神戸の商人は之を外人に転売したとゆう。田辺福町の骨董商芝中新吉氏は発掘者の手許から飾身の残欠を貰うけて、今も之を所藏しているが、島田貞彦氏は之を見て、之は大形の袈裟襷式の鈕部における飾耳で、径二寸一分もあり、少なくとも総高一尺以上に及ぶ銅鐸であると推定し、同品の売先が英国又は米国であると傳聞に考え、大英博物館所蔵第一号銅鐸かそれに相當するものであらうと昭和五年五月発行の考古学雜誌（第一卷三号）に発表せられている。

一六、西牟婁郡中芳養村字林通称平ヶ峰銅鐸

一七、其他

昭和二十年四月太平洋戦争に当り金属供出の事が其の筋よりやかましく言われた時にあたり、同村尾鼻由松氏から同村役場に提出したものである。昭和十八年二月同地松林開墾中鋤先にかゝって出土したもので、別に大したものと思わず、戦時中誰にも鑑定を求むる暇もなく、そのまゝ納屋の隅においていたものである。紋様は袈裟襷・高さ一尺五寸七分・幅上部径六寸三分・底部径八寸七分・重量一貫三百五十匁。出土箇所は平ヶ峰頂上より西北二町許かり西に面した急斜面な半腹で鰭を上下にして、鈕部を谷に向けて地下一尺の処に埋没していたという。

大和丹波市町大字田中山愷男氏の所蔵にかゝる銅鐸は大正四五年頃、紀州田辺の古道具屋から買求めたとゆう、恐らくは田辺付近から出土したと思われる。和歌山縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十二輯（昭和八年）雑賀貞次郎氏の報告「田辺付近の銅鐸出土」の記事中に

田辺の古物商庄司安太郎氏の話によれば矢太ヶ

谷から銅鐸が出た、少し前に田辺の古物行商人通称浜久とゆう者、何処からか小形の銅鐸一口を買い出して来たのを見たと言うことが記されている。果して之が中山氏所蔵のものとなったか否かはわからぬが、関係がありそうにも思えるので参考のため誌しておく。

中山氏所蔵のものは、鈕を失い鰭部も破損しているが、袈裟襷紋で上辺肩の長径四寸六分・短径二寸九分・底部長径六寸六分・短径四寸・総高さ一尺三四寸の中型に属する。

（完）

昭和二十五年十一月十一日

芝口先生、御坊公民館より文化功労者として表彰せられし日の、芝口先生の講演要旨。

農業と貝

片山 隆三

農耕前期の貝

初期の人類の欲望は動物の本能に支配されて生命を欲した。子安貝が生命の門に類似してゐるために生命を司るマジックありと考へられて貴重されたと推考出来る。

之が嵩じて寶となつた。

欲^{ホリ}と々々寶に言葉の上のツナガリを認めざるを得ない。

次いで 生命の延長が 不老不死を希望し 性的欲望として発現する。

斯くて 子安貝は益々貴重され ホド……………ボボ……………欲(ホリ)……………

寶と一環の語彙をなす地位を占むるに至る。

農耕発生の期の貝

既に寶が発生したが、其の寶を以て生命を持続し、性の交歓のみによつて新しい生を哺育しがたくなるので、採集經濟に替はる繰り返しの業務が工夫巧案されるに至る。ウキルシヤフトとしての農業が生れる。

命を米(メイ)に充て

麥(ボリ)を以て寶に充てたとしても極めて自然的な命名称呼である。

穂が類語として挙げられ、佛、舍利等語源通語としていざあるのも此の爲である。

貨幣前期

採集經濟が色々の原因で人類の生計を維持する事が出来なくなると農耕が工夫されことは前に述べた通りで

ある。

随て之に依つて生産される物が實のもつ魅力を獲得する事になつて、米・麥・豆が直接的な欲求を満たす、詮り切實に人類に貢獻する實になつて来る。

斯て農業が殷盛に趣くが、貝は尚まだく、クジツ的な人類の信仰を受けるにたりるので交換の具として登場する訳である。

之が麥……穂……命……米……寶……と呼ばれて直に食物であつたり、寶であつたりした生活の遺留した史實である。

貨幣時代

貨幣の推移に於て、漁幣貝貨から布幣・皮幣・明力錢・錢等種々の形質を具へてゐるのは交換の質量を表現したもので布幣と言ふのは鑄と言ふ農具を意味すると言はれるが、私は、之は矢張り、布からつまり生活必需品たる布の交換に関する貨幣だと考えます。

一、其の証據の一つとして鑄犁の一種で布に関係なく只た布地の形を布幣とするのは考方が浅い。

二、木綿が古具だと言はれた事が、行き過ぎるかもしれぬが、古え具だつまり、寶だ、と言ふ事を意味してはゐないかといふ事。

三、吉貝は古貝の訛まりとした李時珍の説には古、吉の昔の通似を無視してゐるので、貝の貨は即ち寶であつても、よき貨幣たるに、古き貨幣たるに支障なき事。

四、織貝が傳に言ふ如く、詩に言ふ如く、鑄名つまり紋織として貢物と用ひられたと見れる事。

五、貨幣の單位に疋が遺り、尺度に布幕（フバク）尺や鯨尺が残つてゐる程人類の生活に喰込んでゐる事。等々が挙げられる。

後の貨幣時代の農業との関連は唐・宋期に初めて無機肥料として登場するが、餘りに専門的になるので此点にとめる。

（参考文献）

齋民要術

炙蚶 ヤキアカガヒ 鉄鍋上に之を炙き、汁を出し、半殻を去り、小銅杵にて之を奠す、火奠は六、小奠は

八、仰奠、別奠は酢之に随ふ。

炙蠣 ヤキカキ 炙蚶に似ふ、汁を出し、半殻を去り、三肉と共に奠す、蚶の如く別に酢の之に随ふ奠し。

註 三肉は 通常 肉 骨付 臓腑を云ふ

炙車熬 ヤキオホハマグリ 炙は蠣の如し、汁を出し、半殻を去り、尿を去り、三肉一殻、與薑、橘屑を重て炙き、暖めて仰奠に四、酢之に随ふ、太しく熱せしむる勿、則ち芴。

註 尿を去りとあるから腸以下かを去るものと覚ゆ。

農書

元東魯王穎著

吉貝 諸蕃灌悉に曰ふ、木綿は吉貝木の生ずる所。占城。閩婆諸國皆之れ有り、今已に中國の珍寶となす。

農政企書

明徐光啓著

本草綱目

木綿一名古具、木に似る者を古具と名く。或は吉具に作る。即ち古字の訛なり。

註 此の説を採るものに中國二藝沿革史の著書（姓名失念）あり。

泊宅編

吉具 南海の蠻人、木綿を以て紡績し布を爲る。布上細字 雜花卉を出し、屯もエ巧也。名けて吉具布と曰

ふ。即ち古白□布也

書經

禹貢 楊州は厥の篚、織具なり。

傳 織具は錦名なり、織りて具文を爲る。詩に曰ふ、具錦是也。今南夷の木綿の精好なる者。亦是を吉具

と言ふ。海島の夷、弁服して以て來貢す。而して織具の精なるもの、則ち篚に入るゝ也。

註 篚は長い竹製箱で蓋のあるものを言ふ。

南史海南諸國傳

林邑國に古具樹出づ、其花鵝毳の如く其緒を抽て之を紡ぎ以て布を作る。紵布と殊ならず。亦染めて五色をなし、織て斑布となす。木綿は古具木の生ずる所。熟する時、状は鵝毳の如し。以下畧

傳統と土俗 西村真次著

子安 貝から貨幣まで 最近市村瓚次郎博士が、織具といふのは織物と具の二ではなく、織具という一つの
ものであり、それは丁度臺灣の生蕃―高砂族が造つてゐる貝殻を織物に絡りつけたものと同じだろう。

鼎文

具 具は□であつて子安貝を正面から見た寫した事明である。

漢制

蛤灰を以て又灰を爲る。

註 又灰と言ふのは何ものか今明了に指摘しがたいが、今日言ふ處の三和上或はコンクリート様のも
のかと推想するのは漢時の墓穴がシツクヒで放湿され而も極めて廣く用ひられてゐる。

郭寨馳種卷之中

木 六南よりして北は多く苦寨で生きず。只臘月に於て根莠の去を去り、麥穰を取りて厚く之を覆ひ然火
して灰を成し、□培す。如故(カクノゴトク)スレバー二年を過ぎずして皆實を結ぶ。 下畧

卷之下

菜 茄子開花の時葉を取り過ぎ路に布き灰を以て之を圍む。子を結ぶ倍を加ふ。之を嫁茄と謂ふ。

農書 陳敷著

糞壤篇 上畧『下田水冷に亦石灰あり。糞となせば土暖にして苗發し易し。』

食物本草會纂

石灰 蚌灰を呼びて石灰となす。

爲房卿日記

永保元年（一〇八一年）九月

中右記

天仁二年（一一〇九年）十月

御幸記

建仁元年（一一〇一年）十月

芝口 常楠

爲房卿熊野参詣日記

永保元年（八百七十二年前）

藤原爲房：勸修寺家（永久三・四・二歿）
（一一一五年）

前略 九月二十一日申辰 京都出立

二十八日辛戌 戌刻着鹿背山中宿草庵

二十九日壬子 酉刻宿塩屋牧預宅 日高郡（岩内の土高）友高菌財庄等送粮糧等

三十日癸丑 戌刻着石代住人宅 凡除歩之間多入 更漏

十月一日甲寅 辰刻乘海人船 未刻着太萬浦同時越留三栖庄散位正資 秋津庄那賀庄贈霸旅之資

歸路十月九日壬戌 酉刻着日高郡司（岩内の土高）友高之宅 事儲豐膳也 此日切戸山取奈木参挿笠

（十三日帰洛）

梁塵秘抄

後白河法皇御撰

神分三十六種の内

熊野へ参るには何か苦しき修行者よ 安松 姫松 五葉松 千里の濱
熊野二種中より

熊野出で切目の山の槲の葉し よろずの人のうはきなりけり

中 右 記

宗忠公自筆熊野詣紀行

中御門右大臣藤原宗忠

藤原道長ノ裔(保延七年四月薨去 八十歳)

天仁二年十月(今より八百四十四年前)

(京都出發ノ項 歛紙)

十八日 前略……次登鹿瀬山登坂之間十八町其道甚險岨身力已盡林鹿遠報峽猿近叫觸物之感自然動情 漸下坂之間日已暮(凡七町許云々)下人取續松來迎 其後二三町許下從坂於馬留下占宿(大木下成假屋)

今朝天陰頗小雨然則漢左高晴 行程百廿町許云々

十九日 天陰曉立宿所 樹陰甚繁 雲集重掩仍行路不見 取續松過原中十町許 滅火原中八十町 林中見大蝦蟇 此間風吹雨下頗以雷電 参大家王子奉幣 其南晝養 午剋 (晝養所真如院大家庄司高太夫假屋也 送物) 次参連同持王子許奉幣(王子之名也) (此王子許大般若經) 過道場寺前渡日高川(河水大出) 下向女房兩三人居河岸 不知誰人、仍遣駕渡 又送菓子等 宿日高郡氏院庄司石内庄司宅(申剋、庄司有儲)

今日大雨大風 行路之間難行苦行大家庄司五位送物也 晝養所二雖送命運此宿所也 重方來見参 (此里住人也、進菓子) 今日行程百廿町許云々

廿日 雲氣快晴雨脚已止 鷄鳴之後出宿所 殘月之前漸以微行日高川水大出妨行路云々 仍頗次東細道小山上往道廿町許至塩屋王子社奉幣 於上野坂上祓 次晝養(已剋) 次過伊南里次觴王子社奉幣次至切部水辺祓 次参王子社奉幣 (世号兮陪支王子) 日入間宿切部庄司下人小屋

今日或行海濱或歷野徑 眺望無極 遊興多端也 行程百四十町許

廿一日 天時々陰風頗吹遲明出宿所渡切陪川登同山出了祓 石代王子奉幣石代過了 於千里濱晝養之次浴海水 (号塩古利) 越南陪山於王子社奉幣(未申剋) 南陪庄内亥乃野村人宅二宿(国司目代儲又久澄進物) 今日

多過海濱野山 今日行程八十町許歟

目代内記太夫知邦私又送物 久澄使申云、居所四ヶ日許行程也仍遙送進者 此所為軀里在林中宅占海濱浪響鼓動松聲混同嶺嵐大報終夜驚耳京都之人未聞如此事

廿二日 天晴半夜出宿所依今日行程遠也閑興殘月行遙望浮雲走 過南陪野山出早海濱超河参早王子社……

下畧

歸路(抄録)

十一月四日 天明之後出宿所(岩田)於南部未刻晝養 日入之後留伊南 藤中納言庄下人宅

五日 天明之後出宿所辰刻留日高重方宅晝養 重方表丁寧仍給小禄 已時出此所乘燭之後宿宮原俊平宅

云々

歸洛十一月十日

熊野道之間愚記

(二〇二年)
建仁元年

藤原定家自筆

後鳥羽院熊野御幸記卜称ス(七百五十二年前)

五日 京都御出立

十日 前略……次又攀昇シシノセノ山 崔嵬險險岨巖石不異昨日也 超此山参沓カケ王子過シシノセノ椎原

樹陰滋 路甚峽於此邊 有晝養御所云々 又私同儲之 漸休息山中小食於此所上下伐木枝随分造槌付

榊枝 持参内ノハタノ王子(ツチ金剛童子云云)各結付之云々 次出柴原又過野萩薄遙摩眺望甚幽 此

邊高家云々 聖護院宮並民部卿云々 此所共有便事但未尋得 次参王子(田藤次云々) 次愛徳山王子

次くわま王子 次寄小松原御宿 御所邊向宿之處已無之國沙汰人成敗献之 假屋乏少之間無縁者不

入其員占妾宅 立簡之處内府家人抑宿了 不可出之由忿怒云々 國沙汰人又費我進止之由後聞云々

只依人涯分偏頗坎 不及相論又非か入身 此御所水練便宜臨深淵構御所即打過遙尋宿所 渡河参いわ

うち王子入此邊小家重輔庄云々 宮戸部兩人便書如形到來 覺了阿闍梨自御下山向今日於此宿 相待

更可伴参云々 以代官可足之由雖相示猶丁寧之由也 乘燭以後甚雨 今夜甚熱不異三伏着帷 南國之

坎 蠅多又如夏

十一日 雨降 申後聊休 入夜朧々

遅明出宿所（不知御幸）超山参塩屋王子（此邊又勝地有祓）次入晝宿小食 次うへ野王子（野径也）次ツイノ王子此邊歩指 次参イカルカ王子 次参切部王子入宿所（最狭小海人平屋也） 御所前也 但國召宛云々 小時御幸入御歩 晚景又有題即書之持参戌時許 如例被召入讀上了退出（二種無極品）

羈中聞レ波 野径月明

うちもねずとまやになみのよるのこゑ たれをと松の風ならねども

新千載集……定家

萩原や野べよりのべにうつりゆく

衣にしたふ露の月影

十二日

天晴

於此宿所塩コリカク 眺望海非甚雨者可
有興所也 病氣不快寒風吹

遅明参御所出御前先陣

又超山参切部中山王子

次出濱参磐代王子

此所爲小養御所無入御

此拜殿

板毎度被注御幸人数（先例云々）

右中辨召番匠板ヲ放天カンナヲカク

書人数ヲ如元令打付

建仁元年十月十二日

御幸四度

御先達權大僧都法印和尚位覺實

御導師……公胤

内大臣正二位兼行右近衛大將皇太弟傳源朝臣通親

……

次々如此殿上人上北面僧寛快已下三人 下北面皆書之（此最末カイ五度隆俊有之）

自是又先陣過千里濱（此處一町許）参千里王子 次参三鍋王子 自是入晝養所食了参御所之間御幸已出

御（自此宿所御布施以忠弘送遣之絹六疋綿百五十兩馬三匹） 次参ハヤ王子……下略

（歸路）

廿二日

天晴出近露

マナゴ小家晝養了

未一點許着田邊宿所

日入了之後出此宿所過切部入イハニ

明日可

超三宿

遠路稠人無術之間今夜如此迷惑 雞鳴之程入此宿所一寢

廿三日

天晴

日出之後渡川

過小松原

超シノセ山

午始許入湯浅宿所……下略

イハニ

岩内ナルベシ

熊野詣関係ノモノ

宇多上皇 (九〇七年) 延喜七年十月 十七日辛酉夜仲平朝臣自紀伊國來 復命法皇十一日 目切尾(切目ナラン)湊御舟

赴向熊野神社(扶桑略記)

花山法皇 (九〇一年) 正曆二年 されば熊野の道に千里の濱といふ所にてみこゝちそこなわせ給へば(大鏡)

○ 永保元年 (一〇〇八年) 爲房卿の日記

白河法皇 (一〇〇九年) 寛治四年正月

白河法皇熊野へまゐらせ給ひける御供にて塩屋の王子御前にて人々歌よみ侍りける

後二條内大臣 藤原師通

思ふこと汲みてかなふる神なれば

塩屋に跡をたるゝなりけり

(千載集又続詞花集)

徳大寺左大臣

全 立ちのぼる塩屋の煙浦風に なびくを神の心ともがな (新古今集)

○ 梁塵秘抄

○ 天仁二年十月 中右記 熊野詣紀行 宗忠公

鳥羽上皇 (一三〇年) 大治五年十一月(下向)……十八日 上野御宿右衛門督宿所焼亡云々男女両子無爲還着爲慶 廿二

日可令入洛御云々 (長秋記)

鳥羽上皇 (一三四年) 長承三年……二月三日巳時於千里有晝養事於内原(于時西三刻)或人三丹後守爲忠朝臣依病出家云

々 (長秋記)

鳥羽上皇 (一五二年) 仁平二年三月……一員美福院姫宮等令參詣熊野給 或人云今度御熊野詣每事不吉……自御下向先

達実賢法橋惱 富島(塩屋)御宿以后萬死不覺 云々 (兵範記)

鳥羽法皇 (一五五年) 久寿二年の冬熊野御參詣並に御託宜の條に

日ゴロノ御參詣ニハ天長地久ニ事寄セテ切目ノ柑ノ葉ヲ百度千度カザサンコトコソ思召シニ

(保元物語)

後鳥羽上皇 (二〇〇年) 正治二年十二月三日

切目御歌会(切目懷紙……遠山紅葉 海辺眺望)

○後鳥羽上皇

(建仁元年十月) (熊野御幸記)

後嵯峨上皇

(建長二年) 熊野に詣で侍りけるととき上野にてよみ侍りける

入道前太政大臣

惜みし野原は里となりにけり

數そふ民のほどぞしらるゝ (續古今集)

熊野に御幸ありし時岩代の松にむかしを思ひ出でゝ書きつけゝる

前太政大臣

年をへて又逢ひみける契りをも結びやおきし岩代の松

(新勅撰集)

憲淳僧正入堂記

十四日……次經浦路參岩代王子面々注一首愚作曰

(平治物語)

(平治元年十二月) 眼病蒼海千里望 響潔緑松數曲調
平時元年十二月の暁 六波羅より立ちし早馬 切目の宿にて追付たり……大貳清盛は熊野參詣

を不遂して切目の宿より馳せ上るなるが 云々

(平治物語)

信西と申すは南家の博士長門守高階經俊が猶子也……宿願あるに依つて熊野へ参りけり切部王子御前にて相人に行き逢いたり通憲を見て相して曰く云々……廳て出家して少納言入道信西とぞ云ひける

(平家物語)

維盛熊野詣の條に……千里の濱の北御前にて狩装束なる者七八騎が程行き遇ひ奉る

(全書)

長門硫黄島の條に云く 三山へ奉幣をとげにければきりめ王子のなぎの葉を稻荷の社の杉の葉に取りかさねて今はくるめにつきぬと思ひてぞ下向しける

(源平盛衰記)

權亮維盛が蕪坂をうち下り鹿ヶ瀬山を越過て高家の王子を伏拜み日數漸經る程に千里の濱も近付けり

(太平記)

由良の湊を見渡せば沖漕ぐ船の楫を絶え浦の浜木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥 紀路の遠山渺々と薄紫や藤白の松にかゝれる磯の浪 和歌吹上を餘所に見て月にみがける玉津島光も今はさらでだに 長汀曲浦の旅の路心をくだく習なるに雨を含める孤村の樹 夕を送る遠路の鐘 あはれを催す時―もあれ切目の王子に着きたまふ 其夜は叢祠の露に御袖をを片敷き通夜祈り申させ給ひけるは云々

中右記

十八日 宮原出立

鹿ヶ脊山

御幸記

十日 湯浅出立

シシノセ山

沓カケ王子

晝養御所

馬留(宿泊)

十九日 原八十町

大家王子(晝養)

連同持王子

道場寺

日高川

石内(宿泊)

二十日 日高川出水

塩屋王子

上野坂(祓)(晝養)

印南

鰯王子(号分陪支王子)

切部(宿泊)

(海岸風光)

廿一日 切陪川

石代王子

千里濱(晝養)

南陽山

南陪王子

亥野野(宿泊)

廿二日 南陪野山

ウエノ王子

ツイノ王子

イカルカ王子

切目王子(御泊)

(海岸風景)

十二日

切部中山王子

磐代王子

千里濱

千里王子

三鍋王子(御晝養)

ハヤ王子(此日田辺

へ御泊)

紀州人ノ漂流

1. 寛文九年阿州船無人島漂流 藤白長左衛門の事

△阿州海部郡淺川浦勘右エ門船 △十一月初旬宮崎ニテ蜜柑積入 荷主

藤白長左エ門乗組十二月伊勢阿濃津ヨリ出帆難風ニ漂蕩エ

△翌年二月無人島ニ漂着 △更ニ八丈島ニ漕付全島代官ノ世話ヲウク

△五月五日豆州州崎ニ着届出奉行所ノ改ヲウケ帰郷ス

△長左エ門無人島ニテ伐り来レル珍木ヲ幕府ニ献ズ

2. 享保四年有田郡小豆島村喜吉丸ノ琉球漂流

△船頭小豆島村清右エ門 乗組十一名 △阿州ニテ塩ヲ積入九月廿六日

江戸ニ向ヒ箕島出帆 △十二月十一日琉球國与那国島ニ漂着

△東御崎ヲ乗廻スとき嵐ヲウケテ難破ス 乗組ノ者海ニ飛込ビ泳ギツク

忠次郎浪ニマカレテ死ス △島ノ役人住民ニヨリ食料ヲ与ヘラレ難破船ノ

引上ヲセラル 二二里山ヲ越エ宿ヲ定メラル好遇ニアフ △享保五年四月

六日八重山島石垣港ニ行ク 全十日那覇ニ行キ二十九日滞留

△六月十日出船二十日薩州山川港ニ着 △勘十郎山川浦ニ死去ス

△七月十八日大阪ニ向ケ出帆 水主七兵エ金子衣類ヲ持出シ兵庫港ヨリ出奔ス

△九月三日大阪着 七日和歌山着奉行所ニ委細言上 ソレヨリ郷里ニ帰ル

3. 安永八年住吉丸福州漂流 船頭日高郡御坊村半十郎

△安永八年五月越後今町ニテ御城米積入江戸ニ入港(九月十一日)

参考文献

△阿州人無人島漂流記

△紀州長左エ門口書

△南紀徳川史

△享保漂流記

△船頭半十郎覺書

大阪阿倍川津ノ國屋半十

△江戸ヨリノ帰途豆州中木浦ヲ発シ難風ニ漂流スルコト四十日間

△十一月十一日中國福州ノ内ハボニ漂着 △食物ノ供給ヲウク

△船頭半十郎水主一人福州城下ニ行キ取調ヲウク △翌年二月船ニ残レルモノモ

福州ニ行く △二月二十二日乍浦ニ行ク吉原浦弥市病死ス △天明元年^(一七八一年)

六月長崎行ノ船ニ乗リシモ天候悪ク四ヶ月間滞船十月一日出港十一月朔

長崎着 △天明二年九月廿一日取調ヲ終リ長崎ヨリ江戸ニ送ラル 十一月三

日江戸着取調アリ翌二月十九日紀藩ニ引渡サル 紀侯ニ謁ヲ賜ヒ心得ノ

趣一冊宛下サル △四月二十二日和歌山ニ帰ル

4. 天保九年六左衛門船薩南諸島へ漂流

△有田郡北湊^(一八三八年)(船名不明)乗組員七名 船頭六左衛門

△天保九年六月鯨骨ヲ積入レ薩州ニ向フ 七月十六日天草島ニテ荷揚

八月五日山川港ニテ改ヲウケ残り全部荷揚ス △二十一日帰國ノ途ニツキ

出港坊ノ津沖合ニテ難風ニアフ 二十四日薩南諸島中ノ島ニ漂着ス

△村役人ノ好意ニヨリ食料ヲ給セラル △翌年二月二十九日同島ヲ発シ三月五日

山川港ニ着ク △鹿児島ニ行キテ取調ヲウク △三月廿八日山川港ヲ発船

大阪ニ向フ △紀州奉行所ニ引渡アリ △金子五両ヲ紀藩ニ献ズ

5. 天保十二年榮寿丸ノ亜墨利加漂流 周参見浦善助及全浦弥市の事

△兵庫縣西ノ宮中村屋伊兵衛榮寿丸沖船頭善助^(一八四一年)(十五歳ノ時ヨリコトニ奉公ス)

△天保十二年八月欧州南部へ商ノタメ物産ヲ積入乗組十三人

△十月四日犬吠埼ニテ難風ニアヒ漂流ス △翌年二月中旬イスパニアノ船ニ助

ケラル △四月中旬カリホルニアノ或地点ニ夜中上陸セシメラル △コトノ牧

畜場ヲ見付ケテ助ケラル △コレヨリ三日日サンホセニ行ク 一人一人土地ノ

人ニツレテ行ク善助ハカリホルニアノ支配役人コマンダンテ名ハフランセ

シコウノ家ニ引取ラレ好遇ヲウク △帰國スベクサンホセヨリマサトランニ渡

リ唐國へノ便船アルヲ知レドモ他者ニ連絡スルノ暇ナク善助ト初太郎乗船 有

右□□シテ旅費ヲ調ヘラル △天保十四年五月中旬中國広東澳門ニ着ス △肥

郎船住吉丸

△一葉丸福州漂流記

御坊村滋賀屋傳藏船一葉

丸船頭半十郎

△福州漂流帰國物語

御坊村滋賀屋傳藏船一榮丸

△半十郎唐土漂流物語

住徳丸大阪安治川橋津ノ屋

半十郎船沖船頭御坊村半十郎

△心得之趣

△名屋浦鑑

△天保漂流記

△有田郡箕島町誌

△井上善助漂流物語

△亜墨新話

△阿波初太郎物語

△熊野善助亜米利加漂流記

△長崎ニ於ける漂流人受

取の書類

△南紀徳川史

△内田銀藏博士書類

△和歌山縣人米國發展史

其他

後ノ庄藏ニアヒ世話ヲウク △善助ハ九月上旬乍浦ニ送ラレ十一月十七日出帆
十二月四日長崎ニ帰ル △十二月二十七日(弘化ト改元)國許ヨリ迎ノ者来リ二
十九日出立翌弘化二年正月廿三日若山ニ帰着ス

▼弥市ハ善助帰郷ノ翌年弘化三年四月廿五日ヨリ長崎奉行ヨリ紀州藩ニ引渡ノ通
知アリ △五月八日長崎出立閏五月二日若山ニ帰ル

嘉永三年天寿丸ノ漂流 一ハ亜墨利加へ 一ハ魯西亜へ

△日高郡蘭浦泉屋庄右衛門船 乗員十三名 船頭蘭浦虎吉

△嘉永二年十月四日紀州物産積入箕島出帆 十四日江戸入津 △廿三日江戸

出帆翌年正月六日豆州子浦ヲ出テ暴風雨ニ漂流 三月十六日北米捕鯨船ニ

救助サル △長助一行六人他ノ捕鯨船ニ引分ラル

▼長助一行ノ魯國漂流 △五月十九日カムチャツカ港ニ上陸 梅吉死ス △嘉永

四年アヤンニ移ル △十二月廿二日アラスカニ行キ翌五年四月布哇ヨリ来リ

シ船ニテ四月廿三日出港六月二十三日豆州下田ニ入港 △下田ニテ上陸不

許可ニ付丸木船ニテ沖ヨリ放流セラレ 六月廿九日中木浦ニ着ス △葦山役所

ノ調ヲウク

△八月二日江戸勘定奉行所ノ取調ヲウク △嘉永六年正月二日若山勘定奉行所

ニ引渡サル △正月四日郷里ニ帰ル

▼爲吉一行ノ米國漂流 △嘉永三年九月七日オアフニ着船 土佐ノ濡客ニ邂逅ス

△十月十七日オアフ出帆 翌年二月朔香港ニ着船ス △肥後ノ庄藏ニアヒ世話

ヲウク △四月四日フランス軍艦ニテ六月七日上海ニ送ラル △十二日乍浦

ニツク △嘉永三年十二月二十日乍浦出船 二十八日長崎ニ帰着 △翌年四月

中旬取調相済 △四月二十五日紀州藩ヨリ受取ノ役人来リ六月二日長崎発足

二十八日若山着 評定所ニ罷出 △六月廿五日帰國太郎ノ帰國ニ先立ツコト凡

六ヶ月ナリ

△漂流人船渡世禁止 救助トシテ一人扶持ナリ △後外國ノ交渉逼迫ニ付夫々遠

見番藩ノ船ノ乗組等ヲ命ゼラル(士分トシテ苗字帶刀御免)

△瀬戸東水記東亜異聞雜記

類書多シ少異アリ

△漂流記(山本爲吉家所藏)

△天寿丸米國漂流記

△紀州船米國漂流記

△漂流記(江崎太郎兵エ

家所藏)

△異聞別録 魯西亜之部

△亜墨漂客談

△長崎御番書口書

△漂流人爲吉五人の者申

口書

△太郎兵衛手記公儀往復

文書

△名屋浦鑑

△大庄屋文書

其他

7. ^(一八五〇年)嘉永三年栄力丸の米國漂流 塩津浦岩吉ノ事

△攝州免原郡大石村松原八三郎持船 船頭万藏 十八名乗組

△有名ナル播州彦藏ナル者乗組 彼レハ父ト共ニ住吉丸ニ乗組シアリシモ紀州九鬼浦ニ滯船中同港ニアリシ栄力丸ニ同郷人多キ故乗替ヘシモノナリ

△嘉永三年九月十五日神戸出帆 十月十九日江戸着 二十二日江戸出港 二十六日浦賀ヲ出テ難風ニ漂流ス 十二月二十一日米國船ニ助ケラル 四十日全航海ノ後サシフランシスコニ着港 嘉永五年二月二十一日米艦ニテ三月三日オアフニ来ル船頭万藏病死ス △五月中旬コトヲ発シ六月初香港ニ来ル庄藏ニアフ

8. ^(一八六二年)文久二年妻郡高芝村佐藤治衛門米國漂流 (乗組員三名 小運送船)

△文久二年秋八月熊野灘運航中大風ニ漂流ス

△某日アメリカ船ニ助ケラレ サンフランシスコニ着船

△コトニテ佐藤桃太郎ト云フ日本人ニ世話セラル 佐藤氏ハ後進ト改名東原順天堂病院長ヲセラレシ人云ヒ居レリ?

9. ^(一八七〇年)明治十一年太地浦捕鯨船ノ遭難漂流

△明治十一年十二月二十四日(旧曆十一月十二日)

△脊美鯨ノ子持ヲ追ウチ網ヲ入レシモ取逃シ 黒潮ニ乗入レ漂流

△阿多和 三木崎ニ上陸セシモノ 伊豆七島ノ神都島ニ吹キ流サレタルモノアリ

△生還セルモノ八十名 溺死又凍死行衛不明ノモノ百十六名

10. ^(一八九二年)明治二十五年勝浦秋刀魚船ノ遭難

△十二月二十八日遭難漁船六十余艘 乗組漁夫七百四十九人 行衛不明ノモノ二百二十九人

△乗組漁夫ハ縣下十六ヶ町村縣外一二亘ル 日高郡ニテハ八名生存者ナシ

南部町十三名生存者八名 比井崎村四名生存者二名ナリ

△此日天候曇リ居リシモ浪ナク漁獲多ク昼過將ニ帰ラントシテ西北風ニ吹キマクラレ漂流ス △八丈島八重根港及南方ノ青ヶ島 伊豆七島ノ御藏島ニ漂着ス

逸早ク勝浦ニ帰リシモノアリ △海軍省ヨリ軍艦ヲ派遣シテ捜査漂流者ヲ送り

△彦藏漂流記

△アメリカ彦藏自叙傳

(英文ノモノ・訳文ノモノ)

△播州人米國漂流始末

△中山太郎著傳統ト民俗

△水夫傳吉ノ墓発見

東京各新聞其他

△参考文献ナシ

聞書ニヨル

△太地浦和田金右衛門手記

脊美の流れの記

△浅井清徹手記

勝浦漁船遭難記事

△田辺町誌

△日高郡誌

歸サル

11. ^(一八九二)大正十五年^(一九二六)西牟婁郡和深村ノ漁船良栄丸米國へ漂着

△大正十五年十二月八日 良栄丸十二名乗組 季節風ニ吹キ流サレ翌年十月船骸ノミ北米沙市ニ漂着ス

他國船ノ紀州へ漂着

附異國軍艦ノ来航

1. 入唐副使吉備真備乗船帰朝ノ漂着地点

△續日本紀 天平勝宝六年云々 漂蕩者紀州牟婁崎

△紀伊續風土記ニハ牟婁崎ハ太地ノ燈明崎ナリト考証セリ

2. ^(七八七)寛政元年^(一九二六)(或ハ三年?)米艦大島浦ニ来航仮泊ス

△二艘水ヲ汲ミ牧材トシテ大島ニテ樹木ヲ濫伐狼藉タリ

△紀藩ヨリ警軍ヲ送り来リシモ出帆後二日ニテ後ノ祭リトナル

3. ^(一八〇一)寛政十三年^(一九二六)正月 中華通州 李長義船の日高漂着

△正月十日 和田吉原沖ニ漂着ス △正月十五日比井浦ニ廻航 △十七日

藩ヨリ儒者伊藤海藏ヲ派遣應接筆談セシム △二十二日

塩津港ニ廻航 三月十二日淡路マデ送ル

4. 牟婁郡周参見浦 左廷玉の墓

△安永^(七八〇)九年^(一九二六)中華南京ノ商船房州ニ漂着 △長崎ニ護送ノ途中

左廷玉ナル者疾ヲ得七月二十二日死去 △周参見ニ寄港シテ万福寺ニテ

葬儀ヲ営ム △藩ニ於テ同地下山ニ墓ヲ建ツ

5. ^(一八五四)嘉永七年^(一九二六)紀州近海へ異國軍艦出沒

△九月魯艦日高沖通過大阪湾ニ入ル 大阪ニテハ下田ニテ應接スル由ヲ

傳フ △下田ニ向シ出發ス

△紀州災異年表

△續日本紀

△紀伊續風土記

△坂本天山 紀南遊囊

△南紀徳川史

△木村平左エ門手記

漂流奇譚

△墓碑銘

△万福寺過去帳

他ニ記録ナシ詳細不明

△南紀徳川史

△日高郡誌

コノ時ノ物々シキ警備只驚クノ外ナシ

△因ニコノ魯艦下田ニ滯泊中十一月四日ノ津波ニ大破幕府再送ノ資
金ヲ給ス

紀州人ノ発展開拓

1. 有田郡栖原角兵衛ノ蝦夷樺太ノ漁場開拓
2. 下総銚子九十九里濱へ紀州漁民ノ進出移住

著者不明

地名惑問

一、國名

二、郡名

中（京都府）（神奈川県）
那賀（島根）（徳島）（和歌山）（那賀川・那賀村等もあり）
名賀（三重）
那珂（茨城）

河内（大阪）（栃木）
山縣（廣島）（岐阜）
神崎（兵庫）神崎（佐賀）
加茂（愛知）（岐阜）賀茂（廣島）
大野（岐阜）（大分）（石川）

三、村名

朝日（旭）、大野、山田。八幡……………各五十以上
小野、田中、矢田（八田）……………明治・大正・共和

名

苧原

苧野（播磨）

あざみはる
苮原（播磨）

荻原(ひで)

朝来

朝来（且来）
あさこ

朝来（但馬

荒川

神母

神母野

いげ島(備)

(いげ)は(刺)

市野

(せ)の意味(瀬)

(いち)の意味(

市野々